

中国で作られる台湾ブランドパイ



林 哲平

6月初旬に訪れた香港・旺角

で、ある果物屋で売られていた2種類のパイナップルに目が留まった。片方に添えられた札に

は「台湾」、もう一つには「海南」の文字。ともに台湾が開発した「金鑽パイナップル」という品種だが、店での価格は台湾産が中国南部・海南省産の2倍近い。「どっちもよく売れるよ」(店主の男性)

「金鑽」は台湾の生産量の約8割を占める主力品種で、近年は日本のスーパーでも「芯まで甘い」と人気を集める。そのブランドパイナップルが中国に無断で持ち出されている。海南省を中心に栽培され、中国国内や香港などで売られているのだ。

中国のインターネット検索サイトで「金鑽」「パイナップル」と打ち込むと、ショッピングサイトや農家とみられる個人のブログがいくつもヒットする。そのほとんどが中国産の金鑽パイナップルを販売するものだ。

台湾の農業委員会(農水省に相当)によると、1998年開発の金鑽パイナップルのほか、2018年に生み出したばかりの「マンゴーパイナップル」も「流

出」した可能性が高い。

台湾は今年5月、一部の果物などの無断持ち出しに刑事罰を科す法改正を行うなど対策を進めているが、流出を防ぐための壁は高い。台湾の農家によると、パイナップルは実の一部を土に植えるだけで増やせる。ひそかに持ち出されたり、輸出先で勝手に栽培されたりするのを防ぐのは事実上不可能だという。

長年の苦勞の末に作り出したブランドを盗まれるのは憤まんやるかたないだろう。そう思って、農業委の陳駿季副主任委員(副農相に相当)に水を向けると、返ってきたのは意外な答えだった。

陳氏は知的財産は尊重されるべきだとした上で「台湾は栽培技術や気候条件に恵まれている。同じ品種でもハイエンド市場では一般の市場の20倍以上の値が付くこともある」と語った。中国で作られたコピーとは質が違う、とでもいう自信がうかがえた。陳氏は台湾産パイナップルの全てを中国に輸出しても14億人のニーズを満たせるわけではないとして、高い収益が見込める日本などへの輸出を狙うとも強調した。防ぐのが難しい損害を嘆くのではなく、利益を確実に取りに行く。強大化する中国の圧力にさらされながら、生き延びてきた台湾の現実主義でもある。